

色鮮やかな衣装で稚児行列

加古川の尾上神社で「国恩祭」

保護者と一緒に歩く稚児行列の子どもたち＝尾上神社



地域の安寧や発展願う

地域の安寧や発展を願う、東播磨の神社が持ち回りで開く「国恩祭」が17日、加古川市尾上町長田の尾上神社で開かれた。今年は華やかな装飾を身に着けた子どもたちの「稚児行列」も行われ、地域の伝統行事にぎわいが戻ってきた。

国恩祭は飢饉などが続いた江戸時代後期の1833（天保4）年、旧加古郡と旧印南郡で始まったとされる。22の神社のうち、毎年2社ずつが執り行う。新型コロナウイルスの感染拡大以降は神事のみを行うなど規模を縮小していた。

尾上神社では初日の16日、地元自治会役員ら約40人が集まって神事を開いた。17日は神事後、平安時代の衣装に身を包み、冠や烏帽子を着けた0歳～小学6年の子どもたち約50人

が、保護者とともに約100歳を歩いた。本殿では神職が祝詞を読み上げ、子どもたちの健やかな成長を願い、みこが舞を披露した。

稚児行列に参加した小学4年の林風花さん（9）は「冠がちよっと重かったけど、衣装がきれいで楽しく歩けた」と笑顔。同神社の好崎泰州宮司（67）は「コロナ禍になる前の雰囲気は少しずつ戻ってきた。子どもたちや保護者が楽しそうなのが何より」と話した。

5月3、4日には高砂市阿弥陀町生石の生石神社で国恩祭が開かれるという。

（千葉翔大）